

小岱山県立自然公園を探る

荒尾市から玉名平野をみおろす丘陵地帯で、この一帯には数多くの史跡や公園、温泉がある。玉名平野の彼方には、有明海をへだてて遠く雲仙も望まれる。みどころとしては、桜と梨の花の名勝赤田公園、古墳の名勝四ツ山公園や、九州横断の最短ルート有明フェリー（長洲港）などがある。

下・ユニークなレクリエーション基地三井グリーンランドには若さがあふれる。



下・梨の花がほころぶ赤田公園は静かな湖が印象的。



下・賑う荒尾の海水浴場



上・夏の風物をいろいろる長洲の金魚



上・伝統のまとはかいは勇壮な冬の行事(長洲町)

ひとすじの道

★阿蘇郡波野村
市原 来さん

細く長い「作業場」で

産山小池野線——このあたりの道沿いは見事な小国杉が林立し、遠くに蒼く九重のやまなみが望める。標高七百キロ、いわば阿蘇外輪の山ひだを縫って走る県道である。製材を山積したトラックが時折、白い砂ほりをあげて突っ走っている。市原さんの制帽もまっ白。ツルハンを手汗を拭く市原さんのポーズは、まさしく泥人形に見える。だが笑えたものではない。「全く路傍の石ですね」と同情をまじえて声をかけると「いちいちかもうてもおられんですタイ」白い歯が笑う。

市原来さん四十六才。路線職員の仕事に従事して十六年間、文字どおりの「道」ひとすじ。ひとすじといえは、もともと市原さんは「道」には縁がなかったこともない。戦時中、軍属として南方のニューギニア島で飛行場建設に参加し、滑走路の敷設についてはすでに経験済みな

のである。復員後はいち早く波野村役場の路線職員となり、昭和三十六年、県の路線職員に採用され現在に至っている。経験がものをいう「道づくり」のベテランといえよう。だが道づくりは、時代がかわってもやり方は同じだと市原さんはいう。要は「こまめに、いたわりをもって面倒をみる」と肝心らしい。

現在、一の宮土木事務所が所管している行政区域は阿蘇郡一帯（うち蘇陽町と西原村を除く）で、管内の道路は国、県道合わせて四百六十六キロ。熊本土木事務所に次いで管轄道路の延長は二番目。そしてこの道路を三十一人の県路線員が見守っている。市原さんの担当路線は四本で延二十キロの里程。この長く、細い「作業場」で市原さんは自分で仕事の日程を立て、營々と路面の整備に取組んでいるわけである。

砂利と粘土と碎石と

ツルハン・スコップ・鋤、それに腰弁当と水筒。出勤はかきり八時半。自宅から目的の地点まではバスに乗ったり、顔なじみのトラックに便乗したりする。気のよい運転手は市原さんによく道路の講評をする。「この道路に入ると走りよい」「あそこカーブは鋭い」「この三角道路（道の中心部が盛り上っている悪道のこと）運転しにくい」等々。全く阿蘇の道路は始末に負えない。火山灰地特有の「漬物石」を探すのにひと苦労

する。道に、砂利を敷き、碎石を撒く。だがそれだけでは土がカミ合わないので結合剤として粘土を入れる。それでもひと雨降れば流れてしまうことが多い。天気がよくなると猛然たる砂ボコリだ。だから市原さんは、道路の水きりに仕事の重点をおく。雨の降る日は特に穴ボコの水きりに予念がない。この水きりを怠ると、路面の穴埋め作業が十日分も伸びるからだ。穴埋め作業といえは、いちばん手古摺るのがカーブのある坂道。車がブレーキをかける毎に、折角埋めた砂利を押しつけてしまうのだ。

思い出の除雪作業

ことしの二月波野地方を襲った大雪は国道五七号線と県道津留小池野線を完全

にマヒさせた。ふきだまりで一メートル五十センチ、阜も道路も見境がつかなくなった。市原さんは必死になって危険カ所を足がけで見廻りながら土木事務所へ連絡をとった。そしてブルドーザー延五十七台が出動して二週間ぶりにどうにか通行を開始することができた。この雪害は市原さんにとっては初めての試験であり、それだけに忘れがたい思い出となった。雪の日も、風の日も市原さんにとって最大の関心事は「道路」だ。年に一回の研修旅行で県外へ出かけても「よその県の道路」が気にかかる。長女の紀美子さんはバスの車掌で、市原さんの担当路線を走ることがある。市原さんはそんな時「道路がわが家の庭の延長のような気がする」のである。

<炎天下、額の汗をふく市原さん>

